



げんしじん あな
原始人はどうやって、まがたまに穴をあけたの

そうしよくひん どうぶつ ほね いし あな
装飾品として、動物の骨や石に穴をあけた

「まがたま」は古墳時代の代表的な装飾品です。日本独特のもので、縄文時代から弥生時代まで、動物の骨や各種の石に穴をあけて、かざりとして使われました。

まがたまはおおまかな形ができると、鉄くぎやたがねでさらに形をととのえ、研磨（みがいて表面をなめらかにする）にうつります。こうして玉の形ができ上がると、最後に穴をあける作業に入ります。これに失敗すると、せっかく作った玉がこわれてしまうので、これがいちばん大事な仕事になりました。

てつせい かいてんうんどう りよう
鉄製のきりの回転運動を利用した

縄文時代には鳥の骨や竹の管を使って、えぐるようにして穴をあけていったようです。弥生時代になると、鉄器が利用されるようになったため、鉄のきりでもんだり、革のひもをつけたドリルを使ったりして、きりの回転運動によって穴をあけたようです。

その場合、たとえばヒスイは硬度9度ですが、コハクだと2～2.5度でとてもやわらかく、穴をあけるときに石がつぶれてしまう危険性がありました。そのため、穴あけにはそうとう時間をかけ、慎重に作業が進められたようです。（監修・保岡 孝之）

